

# 秦末社会の息づかいが蘇る

角谷常子

本書が対象とする時期は、おおむね劉邦の誕生から西楚の霸王誕生に至るまで、内容は副題にある通り、秦帝国の崩壊である。とはいっても、秦崩壊の原因究明や、崩壊過程の忠実な復元を目的としたものではない。また劉邦・項羽・李斯・趙高などが主要な登場人物として取り上げられてはいるが、決して人物伝ではない。著者が描かんとするのは、「情感理性・思想行動・衣食住行」全てが渾然一体となった「人文世界」である。つまり「政治・経済・文化」とか、「文・史・哲」といった區別をすることなく、「秦の崩壊」という時代そのものをよみがえらせようという時代である。

しかし古代史の宿命ながら、残された文献史料は少ない。今残っているのは「一

万分の〇・〇〇一」であり、「九九九九・九九九は未知の霧の中」であるという。ならばどうするか。いろいろ考えた末、著者は「古代史考証と推理小説の内在的関係」に思い至る。かくて歴史学者はあたたかも「シャーロックホームズやポアロ」のようになる（ちなみに本書の帯には背中にリユック、首にはカメラ、そして手にはなぜか虫眼鏡と開封の地図という出で立ちの著者が微笑んでいる）。もちろんこれは推理小説や探偵ものではない。「歴史の本源は歴史叙事である。歴史叙事は史実の叙事に基づく」というように、その推理は実証的根拠に裏付けられたものでなければならぬ。史料の語らぬことを、さまざまな材料について、史料批判と合理的解釈を重ね、蓋然性を高めつつ推測

李開元著

復活的歴史——秦帝国的崩潰

中華書局

二〇〇七年「二、一三一頁」

する作業は、常に歴史研究者が行っている営みである。本書はそうした歴史研究者の営みの結晶なのである。

さてその材料であるが、文献はもちろん、雲夢秦簡・張家山漢簡といった出土文字資料が大いに活用されている。近年、こうした出土文字資料によって得られた新知見とそれに基づく文献史料の読み直しの作業が進んでおり、多くの論考や著書が出されているが、本書もその例にもれない。例えば、趙高非宦官説。従来『史記』蒙恬列伝の「趙高の昆弟数人、皆隱宮に生る」を根拠として趙高は宦官だったとされてきた。しかし雲夢秦簡にみえる「隱宦」から、『史記』の「隱宮」は「隱宦」

の誤写であることが馬非百氏によって指摘された。それがさらに張家山漢簡二年律令の出現によって、隱官とは「刑期を終えた人が働く場所（刑滿人員工作的地方）」あるいは「刑期を終えた人の身分」をいうのであって、官刑や去勢とは無関係であることが明らかになり、趙高非宦官説となったわけである。新出土資料による知見はこの他にも、文法官吏の子弟が一七歳で学室に入り、試験を経て令史に、さらに優秀者は尚書卒史に出世するというシステムとか、門監は住民が共同で銭を出しあって雇用供養するなど、いちいち出所は明示されないけれども、随所に盛り込まれている。

それにしても、「宦官の趙高」ですっかりおなじみだったのが、「宦官」という枕詞が取れてみると、彼を見る眼が変わるというか、イメージ一新の感を抱かれる方も多いのではないだろうか。実は著者が最も注意を喚起するのは、まさにこのことなのである。顧頡剛氏を引いて言う。我々が信じて疑わない、いやあたかも見慣れた風景の如く受け入れている古代史というのは、「絶えず改造や書き替え」が行なわれ、「各時代の好みの味」が添加された「古代史」なのだ。後世正史とされる『史記』『漢書』にしても、明確な意図を以って書かれた個人の著作であってみれば、それも一つの味である。歴史研究者もそれは十分に理解しているはずである。しかし見慣れた風景を疑うことが難しいこともまた事実である。

<b>中国関係専門店</b> <b>東方書店〔店舗のご案内〕</b>		ご来店をお待ちしております
<b>東京店舗</b> 地下鉄神保町駅●半蔵門線・都営三田線、新宿線 A7 出口より徒歩1分 / JR 御茶ノ水駅●御茶の水橋口より徒歩10分		<b>関西店舗</b> 地下鉄江坂駅●5号出口より徒歩5分 (JR 新大阪駅より地下鉄御堂筋線で2駅目)
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3 TEL:03-3294-1001 / FAX:03-3294-1003 営業時間：10時～19時(月～土) / 12時～18時(日祭)		〒564-0063 大阪府吹田市江坂町2-6-1 TEL:06-6337-4760 / FAX:06-6337-4762 営業時間：10時～18時 / 土日祭休

う。理由はともあれ、『漢書』の断代によって、秦楚の対立の構図がぼやけてしまったことは確かである。戦国の次が秦、秦の次が漢、なのではなく、著者が言うように、秦楚対立という一貫した流れの中で考えてみると、これまでは単なる修辭にしかみえなかつた言葉にも新たな意義が発見される。それは「三戸」である。

著者は劉邦が楚人であることを強調する。「楚考烈王治下で一八年、楚幽王治下で一〇年、楚王負鄒治下で四年」合計三二年間生きた、れっきとした楚人である。従って、戦国以来の秦楚の争いに最終的に勝利したのは、陳勝・項羽・劉邦なのであって、このことが「楚は三戸と雖も、秦を亡すは必ず楚ならん」(范増が引く楚の南公の言)のほんとうの意味なのだと主張するのである。

このように著者が意図するのは単に史料不足を新出資料によって補ってみせることだけではない。長年にわたって加えられてきた味を落とし、無添加の秦末世界を五感で味わってもらうことにある。

著者はそのためにいろいろ工夫している。そもそも我々は様々な情報から人物のイメージを作り上げてゆくが、できるだけ正しいイメージが描けるように情報が提供されている。例えば、年齢。「扈臣」として取り上げる信陵君・項羽・張学良が各々、符を盗んで趙を救い、宋義を殺して趙を救い、西安事件をおこしたのが、三〇歳前後二二六歳・三五歳であったこと。また、劉邦は出仕が三四歳、結婚が三七歳、生子が四〇歳、拳兵が四七歳、皇帝即位が五〇歳と、まさに大器晩成型であったこと。さらに劉邦と始皇帝がわずかに三歳違いで、両者は全くの同時代人であるのに対して、李斯は始皇帝より二一歳年長で、二世皇帝とは異世代の人であること、などである。もう一つは地理的情報である。それは地図や文献による情報にとどまらず、著者自身のあるいは実際に現地調査をした人の知見も含む。本書には軍事拠点や係争の地、反秦勢力を排出した地などが数多く出てくるが、こうした地理的情報は、当時の軍

事行動の一つ一つに合理的根拠を与え、読むものをなると思わせる。著者の地理的関心の高さはかなり年季の入ったもので、若い頃から嬉々として各地を駆け回ってきた地理少年ぶりは、本書巻末の結語に掲げられた世界中の地名からも十分に窺える。本書の時間的・空間的のばは、そうした蓄積に支えられたものである。

多くの読者は、考古学的大発見があった場所や歴史上の大事件がおこった場所に、道なき道をはるばるやってくる。と、ただの田んぼや道路だけで何も無い、という経験をおもちであろう。しかしそれでも行くべきだ、と著者は信じている。博浪沙はほとんど草木もない大平原で、その名の通り風沙の多い場所だからこそ張良は逃げる事ができた、などということも行つてはじめてわかること、と馬元材氏の『博浪沙考察記』を引く。いやそんなことだけではない。おそらく著者は、形のない土地において、あるいは気とでもいうものを嗅ぎ取るために現場に

立つのであろう。本書の写真は、必ずしも内容理解に役立つものばかりではないかもしれないが、著者が感じた気や思いを何とか読者に伝えたいという想いを込めたメッセージのように思える。

さて、これまで本書の特色を述べてきたが、最後に若干の要望と感想を述べたい。

まず要望としては、地図を増やしてほしい。先述の通り、本書には多くの地名とその歴史地理的解説があるにもかかわらず、ごく大まかな地図が二枚とやや詳細な地図が一枚だけなので、せっかくの説明もぴんとこないことがある。結局手元の歴史地図を取り出すこともしばしばであった。日本語版では是非地図を増やしていただきたい。

次にやや違和感を抱いたのは、二世皇帝の評価である。著者は、未来に起こる事柄の予兆は往々にして早熟で衣食に困らぬ王侯に現れるとして、二世皇帝が命の短さを悩んだこと（生命苦短の煩惱）を、魏晉時代の虚玄精神のさきがけとし

ている。本書には、著者が人物の心情にまで迫るだけでなく、著者自身の感慨を吐露するところもしばしばあるが、これもその一つである。ただ「耳目の好む所を悉し、心志の樂しむ所を窮めんと欲す」（李斯列伝）という二世に、魏晉時代の精神的深さなどとても感じられず、正直ちよつとついていけなかった。ただ、こうした記述こそが本書の本書らしいところなのであって、だからこそ論文ではない、自由なスタイルをとっているのである。

最後に触れておきたいのは、趙高の母についてである。著者は、「趙高の昆弟数人、皆隱宮に生れ、其の母刑僇せられ、世世卑賤たり」（「史記」という記述から、彼女は受刑の後、赦されて隱宮にいたが、やがて隱官の役人であった趙氏と知り合（結識）、家庭をもつて趙高ら兄弟をもうけた、と推測している。当時女性には黥（びげ）と劓（き）の二つの肉刑があったので、女性の隱官があっても不思議ではないが、出土資料にはそれを示す例はみえない。

むしろこの『史記』の記述が今のところ唯一の例となるのかもしれない。ただ、肉刑を受けて赦された女性は隱官となる、という認識があったならば、なぜわざわざ「其母被刑僇」というのか、やや違和感を感じるし、女性の隱官はないと考える論者もあるように、この問題にはいまだ結論が出ていない。女性の隱官の有無について、評者は結論を持たないものの、著者の推測には躊躇を覚える。

以上、紹介とともに気付いた点をいくつか述べてきた。本書の特徴は繰り返さないが、とにかく、少年の如き熱き想いがほとばしる書である。楽しく、読後はすがすがしい。（すみやつねこ 奈良大学）

